

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2004年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	社会学研究科	社会学専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	社会学部教授	成田 康昭	印
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ 人文	<b>個人・共同の別</b>	個人 ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	メディア利用行動のカテゴリーー構成意味論からのアプローチ		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科社会学専攻 博士後期課程6年	田辺 龍	印
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科社会学専攻 博士後期課程6年	田辺 龍	
<b>研究期間</b>	2004	年度	
<b>研究経費</b>	200	千円	

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、メディアの受け手研究に新たな方法論を導入しようとする試みである。具体的には、日常生活におけるメディアの利用に着目して、その場面における利用者によるメディアに対する意味付けを明らかにしようとするものであり、その主要な分析対象はケータイであり、これに対して、本研究では構成意味論の手法を用いて接近していく。この方法によって、新たなメディアが日常生活で利用される場面について、そのメディアと類似する機能を有するより古いメディアとの関係をも視野に入れたメディア利用行動の包括的な記述が可能になるのである。言語学に由来する厳密な手続きに依拠する構成意味論の方法は、専門化の視点と対象者の言表の双方に偏することなく話者の意識せざる有意味な世界を抽出する手段であり、その方法を社会科学の分野に導入することは有益であると考えられるものである。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 構成意味論 ] [ 受け手研究 ] [ メディア利用 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究で受け手研究に新たな方法を導入するとした理由は、まずは特定のメディアにのみ着目した議論を避けるためである。具体的には、本研究が主に対象とするメディアは、既述のようにケータイを中心とした移動体メディアである。これまでのメディア研究においては、パソコン等の固定メディアの研究に比して移動体メディアについてのまとまった研究は多くはなかったが、ケータイが急速に普及するに伴って内外で概論的な研究が発表されたように、徐々に研究は蓄積されてきている。そして、新たなメディアの普及に際しては、常にそのメディアに対する否定的な言説が語られてきたように、ケータイについても、その普及初期には、多くは主にマナー問題を中心とした社会問題として語られてきた。これら新たなメディアに対する否定的な言説は、これまで常に見られるものであった。たとえば、テレビについて「一億総白痴化」が言われ、ゲームによる仮想と現実の混同が非難されたように、である。このように、特定のメディアそれのみに注意を向けることは、ケータイの例で言えば、その普及初期の主要ユーザー層を顕在化して済ますことにもなりかねない。ケータイを若者のメディアとしてのみ取り上げて、ケータイを引きこもりやマナー問題を惹起するような心理的な未熟さと関連付けて記述するように。また一方で、ケータイがもはや若者のみのメディアではなくなった現状においても、いつでもどこでも相手に繋がってしまうケータイの簡便さがコミュニケーションの変質をもたらす可能性に対する危惧が表明され、また監視社会批判の文脈においてケータイを捉えるといったように、いまだ急速な普及のインパクトが顕著であるためか、利用者の視点にもとづいたメディア環境におけるケータイのありようを記述し切れていないのが現状である。

上記のような状況を考慮すると、今必要であるのは日常生活におけるメディア利用について、われわれのメディア環境全体の布置の中で考察しうる方法であろう。周知のように、現在のメディア環境は複数のメディアが並存するのが常態である。したがって、社会問題としてのケータイにのみ注意を向けるのではなくして、こうしたメディア環境を前提とした利用者によるケータイに対する意味付けを明らかにすることが必要である。また、インターネットの普及以後顕在化したコミュニケーション・メディアの双方向性は、送り手と受け手の境界を曖昧化させた。この状況においては、メディア受容を均質的に一たとえば「社会的な受容」というように一扱うことが意味をなさないものであることは明瞭である。パーソナル・メディアの普及は受け手像に大きな修正を迫るのである。とりわけ利用者と常にとともにあるケータイは、その受容のされ方を一般化して記述することは困難であり、利用者の多様性に応じた日常生活における多様なメディア受容を記述する視点の導入が必要とされる。

本研究では、日常生活におけるメディア利用を明らかにするための方法として、構成意味論を援用した。これは、野林正路により定式化された方法論〔野林『意味をつむぐ人々』(1986)、『語彙の網目と世界像の構成』(1997)など〕であり、話者による事物の名ざしのシステムを実証的な調査によって記述することを通じて、既存の言語学において重視されてこなかった認識言語の構造を明らかにした。これは換言するならば、語彙論の方法によって、話者の「有意味な世界観」に迫ろうとするものであり、複数の類義語の Sinn (語義・意義) を通じて、それが構成する Bedeutung (meaning) (意味) を明らかにするための方法である。具体的な方法としては、行為者の関心や着眼点である語義あるいは意義一項として現象化する一、これを当該語に対する視点すなわち叙述と組み合わせたマトリックス表を作成することによって、この項と叙述の相関関係を意味の場に開いていくものである。本研究では、語(項)にコミュニケーション・メディアを、視点(叙述)にメディアが利用される状況を適用することにより、メディアを表す単語の Sinn ではなく、メディアの利用に伴って利用者によって付与されているメディアそのものに関わる Sinn を明らかにすることを目指した。この点で本研究は、メディアの Sinn はその利用にあることを前提としており、日常生活の場面の中のメディア利用行動の多様性を明らかにするものである。

**研究成果の概要 つづき**

調査は、ビジネスマン、専業主婦、高校生とそれぞれ異なる生活環境にある三者に対して行われ、その結果として、いくつかの興味深い点を指摘することができた。まず、三者ともにケータイのヘビーユーザーであり、とりわけケータイのメールは、主に親しい関係にある人々とのちょっとした連絡を中心として、広範な場面で利用されている。このことは、インタビューといった方法でも明らかにできることである。本研究の成果としては、語られる部分ではいずれも親しい人々とのやり取りとして立ち現れるケータイのメール利用について、記述のマトリックス表を用いることにより、三社に異なる語られない一意識されない一メディア利用の意味を抽出できたことが挙げられる。結論だけを述べれば、たとえばビジネスマンにとってはケータイのメールは「友好性」といった意味を持つものであるが、これが専業主婦にとっては同じく親しい人々と交わされるコミュニケーションのための手段でありながら、何かほかのことをしながらできるという「行為随伴性」、また夫や家族といった身近な人にも見られるのは憚られるという「個人性」のような意味が付与されている。こうしたことは、対象者によって述べられるのではなく、マトリックス表をもとにした分析から得られるものである。同様に、表をもとにして、イエデンやパソコンのメールといった対人コミュニケーションに用いられるメディアについて、その利用の意味を同一のマトリックス表によって分析している。このように、本研究によって、日常生活におけるメディア利用について、その多様性の一端を明らかにすることはできたと考えている。